

G.A.P

蛹



「あーくん。……いいこと教えてあげる」

うすぼんやりと輪郭が辛うじて判る程度の闇の中、衣擦れの音に混じる囁き声が耳元をくすぐる。ぞくり、と電流が駆け抜けるような感覚に身震いしてしまいそうになるのを堪える。

「……いい、こと？」

「そう……。いいことだよ」

月明かりに照らされた陶磁器のように滑らかな白い肌。ふっくらと艶やかな薄紅色をした唇から紡がれる言葉は、その気がなくとも強引に官能的な気持ちを引き出されてしまう——妖艶さを孕んだ声音。身体を這う指はひんやりと冷たく、焦らす様にさらりと布で触れる手つきでもって上半身を弄り続ける。

「……っ……。くっ……。……ああ」

喉の奥から出るか細く情けない声を必死に堪えようとするが、彼女に主導権を握られて弄び続けられる現状からは、逃れられない。

「かわいい。あーくん」

クスクスと微笑みながら、指は徐々に下半身へと伸びていく。

「っあ、……ちょ、ちょっと！」

「いいから……私に任せて、ね」

――。

――――。

――――――。

「……はっ！ ……………あ」

掛け布団を撥ね退ける勢いで起き上がった。

いつも見慣れた殺風景なマンションの一室。

月から射し込む心許無い光だけが、カーテン越しの室内を薄く照らしている。

背中を伝う冷たい雫に、汗を掻いていたことに気付かされる。

上半身を撫でるふわりと優しい風。

気持ちがいい。

習慣のように手を伸ばした先。くしゃくしゃになったモノから一本を手に取り、口に銜える。

顔の周りをユラユラと照らす小さな灯火。煙草の先は熱を持ち、赤い光が暗がり映える。

「ふう……」

飲み込んだ熱い紫煙を燻らす。苦味と共にほんのり香る懐かしい臭いが、鎮静剤代わりとなっている。

「……………」

久し振りに見た夢だった。

煙草やアルコールのように苦々しくも、愛おしく欲してしまう過去の、夢。

最近でこそ思い出す事も少なくなった記憶を、不意を食らうように夢としてみることになるなんて――あまりの唐突さに、飛び起きてしまった。

「……うん」

隣から鼻を鳴らす声がした。

驚いて目を向けると、すうすうと安らかな寝息を立てている女性。

そういえば、昨日一緒に過ごしたんだった。――完全に忘れていた。

何気なく左手で細く艶やかな髪に手櫛を入れると、眠っていて意識は無いはずなのに、にこりと嬉しそうな顔を浮かべる。

「あーくん。優しいよね」

ぼんやりと女性の顔を見ていると、どこからか声が鳴った。

辺りを見回したところでその声の主がいるはずもなく、声がただの幻聴でしかなかったことに自嘲気味に笑ってしまう。

「そういうところ……冷たい」

声が、寝ている女性の笑顔に重なる。

寂しそうに、でも嬉しそうな表情をする彼女。

さっき見た夢の所為？ それとも、隣で寝ている女性の雰囲気、どことなく似ているからなのだろうか。

彼女の微笑んだ顔を思い出したことで、昔の記憶が、気持ちが――沈んだ奥深くから引き上げられるように鮮明に浮かび上がってくる。

俺は、灰が大半を占める煙草を灰皿に擦り付け、膝を抱えてその場に蹲った。

陽が沈むのが日を追うごとに早くなり、肌を撫でるような寒さが肌を突き刺すような寒さへと変わり始めた十一月。

小学五年生の秋、親父がいなくなった……。

病気や交通事故で死んだとか、昼間の情報番組で主婦の話題に上るような女を作って蒸発、なんてものでもなくて。

いつもの通りの、ふらっと出て行った仕事半分、趣味半分の旅。その旅先で、文字通りの消息不明になってしまった。

当時、俺の通っていた“三並小学校”の直ぐ傍——歩いて五分のところに親父の職場があった。”私立三並学園”そこで臨時教諭として歴史の教鞭を振っていた親父は、教師と別に本業を持っていた。

冒険家、である。

遺跡発掘調査員だ、と親父は言っていたが、映画のようにカッコのいいものではない。新しい遺跡の話を生入れた、と連絡を受ける度に嬉々として家を飛び出して行く親父。そんな話の大半はガセやデマばかりで、それを笑って済ませている親父を見ると、子供ながらに胡散臭い仕事だと思ったものだ。

今回もまた、そんないつもの胡散臭い連絡の一つを受け、五月の中頃に飛んで行ったのだ。

出発一週間前の夜のこと。

居間でテレビを見ていた俺に、親父は唐突に切り出してきた。

「なあ、昌安」

「ん？ 何？」

「父さんな、実は来週から海外で新しく見つかった遺跡の調査に行ってくるんだけど……」

「またあ？ 今度もあの人に誘われて、なの？」

いつもと同じやりとり。少しだけ言い難そうにしている親父と呆れたように言葉を返す俺。

「まあな。……それで、今回はお前も一緒にいかないか？」

「ふーん、いいんじゃない。……って、俺も？ なんで？」

「いや、別になんとなくだけどな。お前も父さんの本とか読んでいて興味あるみたいだし、どうせなら本だけでなく本場に行ってみないかと思ってな。もし、行くとしたら学校はしばらく休むことになるけど……お前の頭なら俺と違って問題もないだろうし、一年で戻って来られるだろうからな。まあ、行きたくなければ行かなくてもいいし、その間のことはいつも通り楓さんに頼んでおくから」

臨時とはいえ、とても教員をしている者の台詞とは思えなかったけど、その時の俺は学校をさぼろうかどうか真剣に悩んでいた。

「……………」

「……………」

「……………」

「どうする？ 行くか？」

「うーん、行かない。俺待ってるよ！」

「そうか……待ってるか。じゃあお土産楽しみにしてるよ」

「うん。期待してる」

少しだけ寂しそうに笑った親父だったが、その時の俺はくしゃくしゃと撫でられた事が恥ずかしくて、嬉しくて、そんな親父の表情の変化には気付かなかった。

色彩鮮やかな紅葉から枯れ葉に変わり、はらはらと枝を離れていく寂しい景観の十一月。

小学五年生の秋、俺は一人になった。

「おはよう」

瞼を開けると、朧な視界の中で女性の顔が覗き込んでいた。

「おは……よう」

誰、だ？

寝惚けた頭で、どこの誰とも知れない女性に挨拶を返す。

「はい。これ」

むっくりと起き上がる俺に彼女はマグカップを手渡してきた。マグカップ越しに伝わるひんやりとした冷たさ。

「これ……………何？」

「何って、ただの水よ。ミネラルウォーター」

中身を訊く俺に、当然のような顔をする彼女。

そんなもの家に置いてあったらどうか？ なかった気がする。

一口、口にすると、すうっと喉の奥へと染み込んでいく。

美味しい。

ただの水がこんなにも美味しさを感じるものだったのかと驚きつつも、水分不足の身体は催促するように水を欲しがり、喉が鳴るほどの勢いで飲み干した。

その様子を見ていた彼女はうん、と頷くと

「じゃあ、私は行くから」

じゃあね、と手を振り玄関へ歩いていく。

憶えない女性とはいえ、一夜を共にしたんだ、せめて見送りぐらいは……。クリーム色のカーデガンを着た彼女を玄関まで送っていった。

「行ってらっしゃい」

「行ってきます」

意外そうな表情を浮かべた彼女は、クスリと笑い仕事へ向かっていった。

俺はというと、寝室へ戻り今見送った彼女の事を思い出そうと一服着いた。

「……………、……………。ふう」

飲み込んだ紫煙は冷たいミネラルウォーター以上に体の隅々まで染み渡り、ぼんやりとした頭が徐々に活性化されていくような気がする。

寝室から見える居間の惨状。缶ビールやワインの空きボトルやらが、テーブルの上や床に転がっている。

果たして彼女は誰だったのか？ 名前は憶えていないが――昨日バイト先のカウンターで酔い潰れていたな。マスターの知り合いとかで近いから家まで送るように頼まれて。女性の家にまで背負って送り届ける途中で目を覚まし、て、……………鳥肌が立った。

思い出したくないものを、思い出してしまった。まだ、あの嫌な感触が残っている。

「……まあ、いいか」

一息ついたところで、寝汗を流しに浴室へ。ユニットバスタイプの小ぢんまりとした空間だけど、蛇口をひねるとすぐに熱湯が出てくるのは気に入っている。

朝独特の気だるい眠気を、シャワーから流れる熱湯が寝汗と一緒に流してくれる。

バスタオルで肌に付いた水滴を簡単に拭き取ると、クローゼットの中から服を取りだしていく。何となく、で選んだ服はどれも似たような感じ。白と黒が多いのは、対して服の流行なんてものに興味がないから。

白を基調とする組み合わせの、黒い七分袖のロングTシャツに白い半袖シャツの重ね着。薄い水色のジーンズに白いローカットのスニーカー。

携帯に、財布に、時計に……。簡単に身支度を済ますと、部屋を後にした。

三並市の都心部から少し離れた住宅街にあるマンション。そこから最寄りのバス停まで徒歩十分。時折見かける主婦達の井戸端会議以外は特に目のつくものもない、静かな街。

最寄りの停留所に着くと、丁度良いタイミングでバスが到着していた。

運がいい。

いつもなら十分～十五分はバスを待つところなのだ。

「本日は三鉄バスをご利用頂きまことにありがとうございます。次は……………」

バスが発車すると、心地悪い振動が座席越しに伝わってくる。何度乗っても慣れる事がない乗り心地の悪さ。乗り物酔いとまではいかないが、乗っているだけで気分はだだ下がってしまう。

かといって、歩くとなると一時間以上かかってしまうからしょうがない。

三十分ほどバスに揺られていると、目的の停留所の降車アナウンスが流れてくる。

「次は十城総合病院前。十城総合病院前。お降りの方は座席横のボタンでお知らせ下さい」  
” 十城総合病院”

ここ三並市で地域最大を誇る総合病院。三並市に住む人間の大半以上が、一度はこの病院のお世話になっているはずだ。

もっとも、俺みたいに病気も大きな怪我もしなければ縁の無い場所ではあるが。

バスの振動から解放されて、一つ大きく伸びをすると少しだけ気分が持ち直る。

今日のは特に酷かった。

そのまま停留所から外来受付のある正面玄関へと歩いていく。

門を越えると一瞬、病院なのかと疑ってしまうほどの広大な敷地に、青々とした緑の景色が広がる。その中心部にどっしりと構える白い大きな建物は五棟に分かれており、それぞれが熊手のように門から一番近い建物へと渡り廊下で結ばれている。

周囲に広がる入院患者を気遣った自然の緑と清潔感溢れる白さのコントラストが、無機質な病院然とした雰囲気と和らげているように感じた。

正面玄関を入れてすぐのロビーは、太陽光を十分に取り入れられるようにとアトリウムを模して、天井だけでなく壁までガラス張りになっている。待合室には咳をする顔色の悪い女性や松葉杖を付いている男性、泣きべそをかいている子供や日向ぼっこをしながら談笑している老人達で席のほとんどが埋まってしまっている。

不謹慎ながらも、繁盛している証拠なのだろう。

「おはようございます」

受付カウンターの向こうにいる女性看護師が顔を乗り出す。

「ああ。おはようございます、倉科さん。いつもご苦労様です」

本来なら名前の記入が必要な面会も、何度も通う内に挨拶だけで入ることができるようになっていた。

受付を通り過ぎると、奥から看護師達の潜めたであろう話し声が耳に届いてくる。

「先輩。305号室の患者さん、また今日も来ていますね」

「そっか……貴方まだ来たばかりで知らないんだったわね？ 彼、毎日のように来ているわよ」

「へえー、そうなんですか」

「私がここに来たよりも長いから……」

「！」

「！」

「うっそお！ ……………じゃないの」

「あっ、でも305号室の患者さんって……………」

「こーら。いつまで喋っているの。ホラホラ、さっさと仕事する」

「あっ、……ハイ」

盛り上がりを見せていた看護師達の会話。

受付横にある階段を三階まで登り、左右に分かれた通路を右へと曲がる。手前から数えて二つ目に、305号室はある。

コンコン。

ノックを二回。

何度も繰り返した行動。

「入るよ」

……………。

返事はないけれど、構わず入る。

真っ白い部屋の中にベッドが一つ。小さな棚には真新しい花が活けられており、ベッドの傍らには医療用器具が数点置かれているだけの――簡素な部屋。

「やあ、元気？」

「……………」



返事はない。

眠っているのだ。

もう八年は経つだろうか。童話の白雪姫や眠れる森の美女のように延々と眠り続けている。目を閉じて、ただ呼吸を繰り返しているだけの人形のように思えてしまう。

顔は青白く、入院着から覗く腕には点滴の針と管が繋がっていて、命を繋ぐ——文字通りの生命線。眠っているだけの年月は筋肉を衰えさせ、身体は痩せ細っている。ただ呼吸をするだけの姿も、とてもゆっくりで苦しそうに見えてしまう。

かつての姿を思い出すには余りにも欠如してしまっている。

「……俺も並んだよ」

「……………」

どれだけ話しかけたところで返ってくる事はない。

けれども、俺は止めることなく話し掛け続ける。

それが俺に出来る精一杯だから。

十一月五日。

親父が消息を絶った。

後数分で終わる昼休みに白熱した校庭、水を注すように担任の村岡先生が俺を呼びに来た。呼び鈴が鳴り、みんな教室に戻る中を一人職員室に連れて行かれた俺は、険しい顔をした先生数人に囲まれて、一体何のことで怒られるのかビクビクしていた。

「倉科君。君はすぐに家に帰りなさい」

頭頂部の荒れ果てた教頭先生が促すように背中を押す。

何で？ と問い掛けても、先生達も困ったような顔をするだけで明確な答えが返ってくる事はなかった。

みんなが授業を受けている中、帰り支度をしている。クラスメイトは早く帰れる俺を羨ましそうに見てくる。俺もみんなにいいだろう、なんて手振りを付けて返す。

「倉科。くだらないことやってないで、早く帰りなさい」

怒られてしまった。

理由もよく分からないまま、俺一人だけが通学路を帰っていく。

月曜の昼下がり。

いつも学生達で賑わっている帰り道も今の時間は人の姿もほとんどなく、とても静かだった。見慣れているのに慣れない静かな景色が気持ち悪くて、妙な胸騒ぎに急かされるように走り始めた。

「ハア、ハア、ハア……っ、ハア、ハア、ハア、ハア」

揺れるランドセルに重心を取られて、息も荒くなりながら走っている。家の前の通りへ差しかかる頃には、脇腹が痛くなって走ることを止めた。

小さめのマンションと昔ながらの長屋に挟まれた少し古めかしい家が俺の家だ。庭に大きな物置があるだけの、どこにでもあるような一軒家。

家の前できょろきょろと辺りを見回していた女性は、俺を見つけると手を上げた。

「まさくん！ 辰彦さんが……、辰彦さんが……」

「楓さん！ 親父がどうしたの？」

楓さんの傍まで駆け寄ると、今まで見たこともない沈んだ表情で俺に話し始めた。

半月ほど前のことだ。

南米辺りの新しく発見された遺跡の、本当に調査をしていた親父は、外周部の探索が終わり調査隊のメンバー数人と共に内部探索を始めていた。遺跡の中心へと進んでいった親父達は四分の三ほど来たところで石室を見つけたそうだ。扉にはびっしりと意匠の凝らされた装飾が施されており、そこに歴史的価値の高いものが入っていることは容易に想像が付いた。

「今から石室の中を調査する」

との連絡を最後に、親父を含む五人の人間が消息を絶ってしまった。

いつまで経っても連絡を寄越さない親父達に、本部に残った調査員達は何かあったのではないかと、最後に連絡のあった石室を基点に内部を隈なく搜索することにした。

その時既に、親父達が石室に入ってから六時間以上経過していたそうだ。

昼夜を問わず搜索した調査員達だったが、手荷物一つどころか問題の石室すら見つけることができなかった。このままでは埒が明かないと一旦搜索を切り上げた調査チームは、十日前、地元警察へ搜索願い及び協力を依頼したのだった。しかし、地元警察の搜索も手掛り一つ見つけることは出来ず難航しているようで、今日まで親父達が見つかることはなかった。

関係者が言うには、まるで神隠しにでもあったのか、石室自体が遺跡のどこにも存在していないという。

そして今日、親父を遺跡調査に誘った知り合いから国際電話があった。家で掃除をしていた楓さんが電話を受け、急ぎ学校の方へと伝えてくれたのだった。

話を聞き終えても、俺は親父がいなくなったということの実感がいまいち湧いてこなかった。

物心ついた頃からちくちくと家を空けていた親父。小学生に上がる頃には家を空ける期間も延びていき、お手伝いさんである楓さんのことが、それこそ親のように思えてしまうほどだった。

そんなこともあってか、今度もまた時間が経てばどこからともなく、ふらりと帰って来るような気がしていた。

「……………」

「まさくん……………」

「……楓さん、大丈夫だよ。きっと……多分、そのうちひょっこり現れるよ。親父のことだもん」

沈んだ表情を見せながらも俺を気遣うと楓さんを見て、俺が悲しんでいてはダメだ——と幼心に思った。

気休めにもならないだろうけれど、今は笑い飛ばせるくらいの方がいい。親父はまだ、死んだと決まった訳ではないのだから。

「そうね……、そうよね。辰彦さんならきっと帰って来るわよね」

俺の拙い気遣いなんて見透かされていたように、楓さんも笑顔を見せてくれた。お互い、無理矢理作った下手な笑顔だったけれど、楓さんの落ち込んだ顔を見て不安でいるよりはずっといい。

「家に……入りましょうか」

「うん」

楓さんに促され、家の中に入っていく。

玄関に入るといつも見慣れた家の中。

少し古めかしい日本家屋然とした外観とは違い、白塗りのレンガや黒い柱が使われた欧風なモノクロティストの内装になっている。玄関を上がるとすぐに緩やかな曲線を描いた階段、その先は左右に別れて俺と親父の部屋がある。一階には右手に居間と台所が併設された——所謂ダイニングキッチンがあり、左手には大量の本が所蔵されたちょっとした図書室のような部屋となっている。

いつも見慣れた家の中だけれど、どこかいつもと違うように感じる。

靴を脱いで居間へと二人並んで歩いていく。たった十数歩の短い距離、無言で歩く俺の手を楓さんは優しく握っていてくれた。

扉を開け、そのままソファーへ。

コチ、コチ、コチ、コチ——

時計の針音だけが大きく聞こえる。時間が経つと共に自分に言い聞かせる言葉だけでは、徐々に込み上げてくる不安は誤魔化しきれない。けれどそれも、握られた手から伝わる暖かい温もりで少し紛れる気がした。

どれくらいそうしていただろうか。

「……………」

「……………」

動くことを忘れてしまったようにぼお——と座っていると、楓さんが口を開いた。

「まさくん……今日は何が食べたい？」

優しい声音で、いつも通りの事を聞いてくれる。だから俺も答えることができた。

「……………グラタン」

「グラタンね。わかったわ。美味しいの、作ってあげるからね」

立ち上がる楓さんは俺を見て微笑むと、握っていた手を離して買い物へ行く準備を始めた。  
一緒に来る？ と誘われたけれど、俺は首を横に振った。

「じゃあ……少しの間待っていてね」

ばたん、と扉が閉まり——一人になった。

今までも一人でいることは多かったけれど、それはあくまでも一時的なもの。今日から訪れる恒久的なものではない。

一人きりの家の中。

俺は少しだけ、ほんの少しだけ自分に甘えることにした。

楓さんが帰ってくるまでの数十分。その間だけ——。

太陽の祝福する優しい光に照らされ、嬉しさを表現するように花の粉を振りまく四月。

親父がいなくなってから半年が経ち、俺も学年が上り六年生になった。

あれから俺は、変わらず楓さんと暮らしていた。

お手伝いさんである楓さんとは六歳からの付き合いになる。

白い肌に映える黒い髪は長くて、いつも後ろで一つに結んでいる。怒るとかなり怖いけれど、普段は優しい顔が印象的な大人しめの人。子供ながらに美人だと思う彼女は二十九だという。

家以外に何か別の仕事をしている風でもないし、結婚や誰かと付き合っているような素振りもみえない。

そんな彼女が、なぜ俺や親父のところに居てくれたのか、今思うと不思議だ。

楓さんとの二人きりの生活にも徐々に慣れてきて、少しずつだけど炊事や洗濯などを教えてもらっていた。

始めは、楓さんがいなくなってもいいようにと覚え始めたことだったけれど、一人ぼっちになる俺を見捨てることができなかったのだろう。彼女は俺と一緒に居ることを選んでくれた。

今まで通り――お手伝いさんという形だけれど、俺は嬉しかった。

それと、相変わらず親父が見つかったとの報せはない。

定期的に知り合いの晶さんからの連絡はあるみたいだけれど、学校にいる時に電話がかかってくるのが殆どなので直接話すことはない。

それでも、手掛かりが無い訳ではなかった。

海外へ行く度に毎月振り込まれていた生活費は、消息不明になった今も滞ることなく続いており、親父がどこかで生きていることを信じられる唯一の手掛かりだった。

親父がどこかで生きている、今はそれだけで十分。

そして、彼女と初めて逢ったのもこの頃。

「じゃあ、またねー」

「またなー」

変わり映えのしない毎日、クラスメイトと別れて家へ帰っている時のことだった。

家まで数十メートルの見飽きた通りを歩いていると、見慣れないものが目に入った。

家の門前に人影。

宅急便や郵便の人かな、と思ったけれど、遠目からでも判るぐらいにぼおーっと突っ立っている。

親父がいなくなってから訪ねてくる人も限られてしまった家。楓さんを除いては、それこそ宅配便や郵便の人ぐらいのもの。その楓さんも今日は用事があって来ない日だ。

今日、家を訪ねる人は誰もいないはず。

家へと近付くにつれ、段々と人影のシルエットがはっきりとしてきた。肩口まで伸びた茶色い内巻きのボブヘアの女性。親父が教鞭を振っていた三並学園の制服の上にセーターを着ていて、短めのスカートの殆どをセーターが覆い隠していた。

口には何かを銜えていて、そこからは煙がのぼっている。風に乗って臭ってくる香ばしく懐かしいにおい。

煙草だ。

何で吸っているんだ？

小学生の俺でも、煙草を高校生が吸うのはダメだと分かる。一般常識というやつだ。

夕方。それもある程度人が通る道路に立って、制服姿で堂々と吸っているのだ。

いつ警察に捕まってもおかしくない。

それなのに当の本人ときたら、周りを一切気にしていないように深々と紫煙を吐き出している。何回か繰り返して、吸い終えたのだろう。煙草を地面に捨てるとぐりぐりと火を消している。

うわ、ポイ捨てもした。

急に足を止めたかと思うと、肩から下げた鞆をごそごとまさぐり、何事もなかったかのように新しく取り出して火を付けている。

ふてぶてしいにも程がある。

喫煙にポイ捨て。……不良だ、不良が家の目の前にいる。

でも、何でそんな人が家の前にいるんだろう？ 親父がいないなんてこと、みんな知っているはずなのに。

話しかけたくはなかったけれど、話しかけないと家に入れない。仕方なく、声をかけた。

「何、してるの？」

「……んー？」

煙草を銜えたまま、顔だけが俺を見る。

煙草を吸っているとは思えない艶やかな白い肌、ふっくらと薄紅色をした唇に細く凜々しい眉と切れ長の瞳。一見して綺麗ではあるけれど、人を近寄らせないキツイ印象の彼女。

けれどその時の俺には、何故だかとても弱々しい——例えるならそう、怯えたうさぎみたいだと思った。

「……………」

見るものを威圧する眼光鋭い瞳も、強いというよりも強がり、寂しそうな感じがして、振り返った右の眼には目尻から頬にかけて一筋跡が付いていたように見えた。

「何？ 何か用？」

声をかけられたことに気分を害したのか、銜えていた煙草を離して斜に構えると、苛立ち混じりの声で問われた。

でも恐くはない。

「あっ、うん。……何してるの？」

さっきと同じ質問。

彼女は左手で髪をかきあげると、面倒くさいとばかりに溜め息を付いた。

「何でもいいでしょ。君に関係ないんだから」

「……うん」

ハッキリと拒絶する彼女。それでもじっと見ていると、キツく睨み付けられてしまった。

「まだ何か用？ ないならさっさと家に帰りなさい」

「……そこ、俺の家」

俺の言葉に彼女は少しだけ驚いて目を見開くと、数歩だけ門の前から退いた。

変な不良だな、と思ったけれど話は通じるみたいだし、挨拶くらいしておいてもいいのかな。

「じゃあ」

早く家の中に入ろうと門を開けかけたところで、ランドセル越しに声をかけられた。

「辰彦っ……倉科、先生は」

「親父はいないよ」

「……そう」

「うん」

親父のことを先生と呼んだってことは生徒で間違いないんだろう。でもだったら、親父がいないことなんて知っているはずなのに……。まさか、親父に何か言われたかやられたかして、その怒りの矛先を俺に向けてきた、とか？ いや、そんなことはないか。やろうと思えばいつでもできたんだろうし。そんな雰囲気にも見えないし。

……だったら、何で家まで来たんだろう？

ごちゃごちゃと考えながらランドセル越しの彼女と会話、しようとしたけれど彼女は押し黙ってしまった。

「……………」

「……………」

「ねえ……上がってもいい？」

優しく吹く風にも掻き消されてしまいそうな弱々しい声。さっきまでの威勢はどこへ消えたのか。振り返ると、今にも泣き崩れそうな彼女が縋るように俺を見ていた。

家に上げろ、かぁ。

楓さんには、知らない人を上げてはいけません、と言われていた。

親父には、弱っている人には優しくするんだぞ、と言われていた。

でも家に上げると……………烈火の如く怒った楓さんの顔が浮かぶ。怖いな。

少しの逡巡の末、俺は決めた。

「いいよ」

その言葉を聞いたからか、彼女は少しだけ目尻から力を抜くと、乾いた跡を塗り重ねるようにつうと雫が流れた。

それを目の当たりにして、俺の選択は間違っていなかったんだと思った。

彼女を家の中へと招き入れた。

素性どころか名前さえも知らない彼女。だけど、親父の名前を知っていて親父の学校の生徒だから。

彼女は靴を脱ぐと律儀に揃えていた。

その所作は人目を気にせず煙草を吹かしていたさっきの人間と同じとは、思えない。

「こっち」

「……………」

無言でついて来る彼女を居間へと通す。

背負っていたランドセルをソファに投げて座ると、彼女は項垂れたままへたりこむように腰を下ろした。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

誰も喋らない静かな居間で、時計の針と彼女の鼻がすんすんと鳴る音だけが大きく聞こえる。

このまま黙っていてもしょうがないし、彼女が誰なのかくらい訪ねておかないと。

「ねえ、お姉さんは誰？ 親父の知り合い？」

「伊奈世……………。辰彦っ…………倉科、先生の、生徒」

俯いたままぼつりと答える。

いなせ——名字とも名前とも取れる微妙に分かりづらい名前だな、と思った。少し待ってみたけれど、それ以上の言葉は彼女の口から出てこなかった。

「家の前で何してたの？」

「……待ってた」

「……………」

「……………」

「誰を？」

「……………」

待ってた、誰を？ って、親父の生徒なんだから親父以外にいないだろう、と言った後に気づいた。



「……………」

「……………」

「……………」

「……君」

俺？ 何で？ 彼女とは今日会ったばかりだし、そもそも親父の生徒が俺なんかのこと知っているのか？

「俺？」

「そう……君」

だらりと垂れた髪から覗く伊奈世さんの眼が、弱々しく俺を見ている。

赤く腫れた目はホントにうさぎのようだ。

予想斜め上をいく答えに、俺は理解できなかった。なぜ親父じゃなくて俺なのか、さっぱりだ。

「何で？」

「辰彦っ……倉科、先生の息子、だから」

だから、だから何なの。

俺が親父の息子だから……………って、さっきから伊奈世さんは何で親父のことを何度も言い直してるんだ？ そんないちいち面倒くさいことしなくてもいいのに。

……………んっ？ ああ、そういうことなのか？

「そっか……でも親父は戻ってきてないよ」

「……うん」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

また黙ってしまった。

これ以上何を言えばいいのだろうか。って俺が悩むことなのか、これ。

「じゃあさ、……親父の部屋見る？」

「……えっ？」

「親父の生徒なんでしょ？」

「……うん」

「せっかくなんだし、さ」

「……………」

案内しようと立ち上がった俺の服の裾を、ぐいっと掴む伊奈世さん。

「ねえ。名前教えて」

「昌安」

「まさあ……いい名前」

「ありがと」

ゆっくりと立ち上がっても、裾を掴んだまま離してはくれない。

「行こう」

「……わかった」

居間を後に、親父の部屋へと向かう。

裾を掴まれている所為で、俺は早く連れて行きたいのにゆっくり歩く伊奈世さんが邪魔で進みづらい。

「ねえ……」

「何？」

「なんて呼ばれているの？」

これまた唐突だ。何でそんなことを訊くんだろう？ まあ、いいや。

「まさ……とか、名字かな」

「そう……」

「なんで？」

「……………」

会話も続かない。

緩やかな曲線を描いた階段を上り、左右に別れた廊下の右へ進む。廊下沿いに扉が三つ並ぶ真ん中の扉を開ける。

入った人を圧倒するような、壁一面の本棚が左右に並ぶ親父の部屋。

部屋唯一の窓から射し込む光がふよふよと漂う塵を薄く晒している。

親父がいなくなってから一度も入ることのなかった部屋は、親父がいた頃と何も変わらない。

週に一度、楓さんが掃除をしてくれているから埃は溜まっていないけれど、新書から古書まで様々な本達から臭ってくる黴臭さと、部屋中そこらかしこにこびり付いた煙草が混ざり合った臭いは、親父が帰って来なくても、楓さんが換気をしてしても変わらず染み付いている。

親父の匂い。

伊奈世さんもそう感じたのだろう。

「辰彦先生……」

親父の名前を口にすると、ゆっくり窓の傍にある机へ歩いていった。

やっぱりこの人、親父のこと好きなんだ。だから俺に親父のこと聞きにきたんだ。

俺は伊奈世さんの後姿を見ながら、静かに扉を閉めて部屋を出た。そのままもたれ掛かるように座ると、中からすすり泣くような声が扉越しに聞こえてくる。

なんというか、完全に親父のとばっちりだ。親父、小学生に尻拭いさせるってどんな大人よ。

それにしても、親父もそれなりに人気はあったんだなあ。

手持無沙汰な俺は廊下の窓から外を眺めていた。

雲の流れる空は、赤々と燃えているような茜色。

そういえば、伊奈世さんの煙草も同じ臭いだったかも。

茜色の空が暗く透き通った紫に変わり始めた頃、ガチャリと扉を開ける音がした。

うつらうつらと眠りかけていた俺は、そのままごろん、と後ろに倒れてしまった。扉を開けたまま伊奈世さんが見下ろし、寝転がった俺は見上げる。

スカートの中が見えているのは、言わないでおいた方がいいだろう。

少し目が腫れているものの、さっきまでのうさぎのイメージはない。目尻には鋭さが戻り、人を簡単に寄せ付けない ” 孤高 ” という言葉が似合う狼のようだ。

「……………」

「ありがとう」

「……うん」

その変わり様に目を奪われてしまった俺は、差し出された手に反応することができなかった。そのまましていると、いつまで待たせるんだ、と目で訴えかけられた。慌ててその手を掴むと勢いよく引っ張り上げられる。

「あ、ありがとう」

「よし」

そう呟くなり、俺を置いて部屋を出て行ってしまった。とんとんとん、と軽い音を鳴らしながら階段を降りていくのが遠くに聞こえる。家主の俺に構わず、彼女はさっさと居間へと向かっていく。

何だか急に凶々しくなっていないか。

遅れて居間に入ると、伊奈世さんは立って待っていた。

「ねえ、いつも何食べているの？」

「えっ……………」

ホントに唐突な質問ばかりだ。脈絡のない質問をされても、理解しろというのに無理がある。

訝しげな表情を浮かべると、彼女は壁に掛けられた時計を指差す。

何だろう、と見ると針は七時を回っていた。

「何食べているの？」

もう一度同じ質問。

「いつもは、楓さんが作ってくれてる」

「そう……その人、今日も作りに来るの？」

伊奈世さんは一体何が言いたいんだろう。

「今日は来ない」

今日楓さんは休みだ。だから伊奈世さんを家に入れることも出来ただけだ。

「じゃあ、今日はどうするの？」

「適当に何か作って食べるつもり……」

「ふーん。じゃあ良かった」

「何が？」

「私が作ってあげる」

そう言うと、キッチンへ入っていく。

「えっ？ ちょ、ちょっと……」

「何？ 嫌なの？」

「え、あ、いや……別に」

有無を言わせない強引さ。俺は仕方がなく、彼女に任せることにした。さっきまでの弱々しさは一体何処へいったのやら……、まるで詐欺だ。

「へえー、けっこう揃ってるね」

ガサゴソと他人の家の冷蔵庫を漁る伊奈世さん。セーターを腕捲り、楓さんのエプロン姿の彼女が何をするのか見ている。楓さんとは違う、大人になりかけの少女。この家で、親父と俺と楓さん以外でキッチンに立つ人を見るのは何とも変な感じだ。

「何？」

俺がじっと見ているのに気付いたのか、不機嫌そうな顔をする。見られるのはあまり好きじゃないようだ。

「別に」

伊奈世さんの視線から逃れようと後ろを向いて、ずるずるとソファーにもたれ掛かる。視界に入ったランドセルのおかげで宿題を思い出した。

忘れてた、今の内にやっておかないと。

黙々と宿題をこなす俺の耳に、包丁の軽快な音や沸騰するお湯の音が聞こえてくる。時折、あっ、とか、やばっ、なんて不安な声も耳に入ってくるけれど……気にするのも面倒だ。

宿題が終わる頃には料理の方も終わったみたいで、居間のテーブルに特殊な感性で盛りつけられた料理が運ばれてくる。

どう、と満足そうな顔をして見てくる伊奈世さん。

いや、どう見ても盛り付けだけで不味そうにしか見えないんだけど……。

「いただきます」

「い、いただきます」

勇気を振り絞って一口、口に運ぶ。

「これ……」

懐かしい味がする。

「わかる？ 辰彦先生好きだったでしょ」

これは親父の好きな味だ。

「何で？」

「ふふ。私の得意料理だからね」

「そう、なんだ……」

俺はそれ以上先を訊くことができなくて、食べることに集中した。

この人多分、多分だけ親父のことが好きだった、だけじゃない。親父も伊奈世さんのこと……。

「美味しい？」

「……うん」

伊奈世さんも黙々と食べながら、時折俺の方を見てくる。俺はご飯に夢中になった振りをしたまま、彼女の視線を誤魔化す。少し嬉しそうに笑っている顔を、なぜか直視できないでいる。

「ごちそうさま」

「ごちそう、さま」

食後に一息つくと、伊奈世さんは食器を流し台へ持っていく。

俺も手伝おうとキッチンへ行くと、

「邪魔だから向こう行って」

一喝されてしまった。

また手持無沙汰になった俺は、仕方なくソファーにもたれかけてテレビを付ける。ブラウン管に徐々に映る、他愛のない今流行りのクイズバラエティー番組。

「あっ、これ私も見てるよ」

流すようにぼおっと見ていると、洗い物を終えた伊奈世さんが歩いてきた。

「……わっ」

急に頬が冷たいものに挟まれた。ひんやりと冷たくびしゃりと濡れている手。何を考えているのか、伊奈世さんは悪戯好きの子供みたいだ。

「ふふふ」

笑いながら俺の隣に座る伊奈世さんに文句をつけてやろうと思ったけれど、既にテレビをに夢中になっていて、俺は放置されてしまった。

勝手な人だ。

クイズバラエティー番組が終わり、二本続くドラマの一本目が終わった。

未だに隣でテレビを見ている伊奈世さんは、時折机の上のお菓子やマグカップに手を伸ばしている。

二本目のドラマの途中に無言で立ち上がると、伊奈世さんは不思議そうに見上げてきた。

「どうしたの？」

「お風呂。……準備しないと」

「ふーん、じゃあ私もついてく」

伊奈世さんはテレビを消すと俺の後をついてくる。

「ねえ」

「何？」

「伊奈世さん、はさ」

「伊奈世、でいいよ」

伊奈世には訊いておきたいことがある。風呂場に着くまでの短い廊下で十分なことだ。

「じゃあ……伊奈世はさ」

「うん」

「今日いつまでいるの？」

後ろで足を止める気配がする。

俺も歩みを止める。けれども、後ろを向くことはない。

「……………、ダメかな？」

声が小さくて聞きとれない。

「えっ？何……」

振り向くと、伊奈世はまた俯いていた。

「泊まったら、ダメ？」

さっきまでの凶々しさ、強引さはどこへ消えてしまったのか。まるで、さっきまでの彼女は虚勢を張っていたように思えてしまう。そんな伊奈世を見てしまうと、ダメだなんて言えない。言える訳がなかった。

「……いい、けど」

放って置けなくて、OKを出したけれど。女の人を家に泊めるなんて初めてで、やっぱり恥ずかしくて、落ち着かなくて、その場にいたくなくて、止めていた足を動かした。

伊奈世は小走りで駆け寄ってきて、先に行こうとする俺の腕を掴んだ。

「ありがとう」

耳元で囁かれる。

それがこそばゆくて、言葉の意味なんて入ってこない。彼女の声と吹きかけられた息の感触だけがいつまでも耳に残る。

濡れた髪をバスタオルで拭きながら、伊奈世はぶかぶかのシャツを着ただけの変な格好で現れた。

男の二人暮らしだった家に女性物の服なんてないことを話すと、親父の服を着ると言い出したのだ。着たのはいいけれど、あまりにもサイズが合わなさ過ぎて思わず嘔き出してしまった。

「じゃあ、おやすみ」

「おやすみなさい」

伊奈世を俺の部屋に案内して、居間へと戻る。

こんなところで寝ているのを見られたら絶対怒られるだろうな、なんて怒った楓さんの顔を思い浮かべつつソファに横になった。

意外と寝心地は悪くない。

コチ、コチ、コチ、コチ――

真っ暗闇の中、時計の針音だけが鋭敏化した耳に入ってくる。妙にはっきりとしたその音が煩くて敵わなかったけれど、いつしかその音さえも意識から溶け出していく。

コチ、コチ、コチ、ガチャ、コチ、コチ――

遠くで違う音がした。

何の音だったろうか？

ぺたぺたぺたぺた……

何か柔らかいものが張り付いて、引き剥がれる音がする。音は段々と俺の方へと近づいてくる。

音が止んだ。

すうすう。

耳元で息を吹きかけられるような音と生暖かい風を感じる。まどろみかけていた意識が現実へ引き戻された。ぱっと目を開けると、身体は横になったままで目の前に何かがあった。

耳元では相変わらず息遣いがしている。

どうやら夢ではないようだ。

さっきまで見ていたドラマの影響だろう、それが幽霊か何かに思えて恐くなった。早鐘を打つ心臓。目の前を塞ぐ何かに恐る恐る視線をずらしていくとそれは……………伊奈世だった。

良かった。

「起こしちゃった？」

俺が起きたことに気が付いた彼女は、それでも声を抑えた囁き声で訊いてくる。

「どう、したの……」

「……………一緒に寝ようかな、って」

「……………」

「……………」

「はぁ？」

思わず飛び上がってしまう。

伊奈世は飛び起きた俺の頭を避けると、微かに笑みを含めた顔で見ている。

「何考えてんの！ ……無理無理、無理だって！」

「何で？」

「子供じゃないんだから。一緒に寝るなんて……………恥ずかしくて出来るか！」

「そう？ 大人になったらみんなやることだよ」

「で、でもっ……」

「ふーん。まだまだ子供だね」

ああ、もうっ！ ああ言えばこう言う。

小学六年生にもなって女の人と一緒に寝るなんて、ありえないだろう。

嫌がる俺にじりじりと迫ってくる伊奈世。有無を言わさないように、強引に抱き寄せられた。親父とは違うやわらかい感じ。親父の服から煙草の臭いと本の臭い、伊奈世の髪から香るシャンプーの匂いが混ざって、何だか懐かしくて安心してしまう。この感覚は昔から知っている気がして、俺は抵抗することを忘れてしまった。

「……………」

彼女の心臓のどくんどくと波打つ音が俺の耳に聞こえてくる。ゆっくりとした音は、少しずつ速くなっていく。それに合わせて、俺の中にあつた既知感のような安堵の気持ちは徐々に薄れていき、代わりに違う気持ちが生まれる。

俺の心臓はまた激しく鼓動を始める。顔が火照り、熱くなっていく。きっと顔は茹で蛸のように真っ赤にでもなっているだろうな。唯一の救いは明かりが付いていないことだけだった。

「あーくんは大人だね」

「……………あーくん？」

「君のこと……嫌？」

未だかつて聞いた事のない、斬新で恥ずかしい呼び名。

幼稚園の時に、女子達に呼ばれたまーくん以来の恥ずかしさを感じる。でも、結局これも抵抗したところで、意味はないんだよな。

「何でもいいよ、もう」

「ふふ」

伊奈世は一度放すと、ソファーに座り両手を広げた。

「もう一度」

「……………」

もう主導権は彼女に握られていて、俺は抗うことができなかった。伊奈世に引かれるようにソファーへ倒れ込む。抱き締められたまま身動きの取れない状態は、窮屈だけれど彼女の身体をより身近に感じられる。

俺の身体はどんどん熱くなっていく。

「ねえ」

「……何？」

「あーくんはさ、彼女いるの？」

「……そんなのいないよ」

「ふーん」



それきり伊奈世は黙り込んだ。

そんな事よりも、女の人に抱き締められたままの恰好で眠る事なんて出来る気が全くしなかった。ただひたすら早く眠くなる事だけを考えて目を瞑る。

「ねえ」

「……何？」

「私じゃ……………変かな？」

聞き取れない伊奈世の言葉を確認しようと顔を上げると、こんなに近くにいるはずなのに暗くて見えない。

伊奈世は耳元でもう一度囁く。

「私と付き合わない、かな？」

「……………」

付き、合う。俺と？ 何で？ 親父が好きなのに、俺と付き合うの？ それに付き合うってよく分からないし。

今日一番、いちばんわからない事だった。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

考えてもよくわからない、それに、何だか眠くなってきた。もうなんでも……………いいや。

「……………」

「……………」

「……………」

「……うん」

俺の答えを聞くとぎゅーっと抱きつきを強くして応えた。嬉しいのだろうか。

俺はよくわからない流れのまま、名前以外何も知らない伊奈世と付き合うことになった。

彼女と初めて出逢ったこの日、俺達は初対面の他人から恋人同士の他人になった。

俺は彼女の腕に抱かれて、いつの間にか眠っていった。

私は一体何をしているのだろうか？

目の前でずやすやと眠っている男の子を見て、そう思う。

昨日、正確には今日。この男の子と私は恋人になった。別にそんなつもりは無かったのに。

ただ私の中で、日に日に拡がっていくぽっかり空いた穴を、塞げないまでも留めることくらいはできるのではないか？

そう思った私のエゴ。それだけ。

「父さっ……」

寝言だ。夢でもみているのだろうか？

昨日一日、少し生意気で大人びて見えた男の子は、やはり歳相応なのだなと思う。

「……………」

何だか無性に身体がニコチンを欲していて、たまらなく吸いたい衝動に駆られる。けれど、気持ち良さそうに寝ている彼を揺り起こしてしまうのが悪くて、動けない。

じっと眠るのを待っていても、じりじりと強まる喫煙衝動に眠気どころか段々と冴えてくる意識。

仕方なく目を開けてみたけれど周囲は辛うじて輪郭が分かる暗闇で、見るものは何もない。聞こえてくるのは時計の針音と彼の心音と呼吸、そして私の心音だけ。

私の手元には彼の無垢な寝顔。

まだ少し丸みの残る輪郭、外で遊んでいるほんのりと日焼けした健康そうな肌。先生に似て優しそうに見える目は太くしっかりした眉の所為か、優しそうな少年にもわんぱく坊主とも取れる。何の手も加わっていない自然で整った顔立ち。

そんな彼の寝顔を見ていると、柄にもなく後悔してしまう。

私はこんなことをしにきたんじゃない。

私は一一会いに来たんじゃない。

彼にも、先生にも、会いに来たんじゃない。

胸が押し潰されるくらいの苦しい圧迫感。眠ることが苦痛に感じてしまう程の焦燥とその後訪れる脱力感。自分は一人なのだという現実を押し付けられて、私は耐えられなくて逃げてきただけ。

形ばかりの痛みしかない居場所から逃げたくて、嘘ばかりの日常に耐えられなくて。

私にとって唯一心休まったモノの残滓に縋りたくて。気が付くと昨日一日、倉科の表札が埋め込まれた門を前に立っていた。

だけど、それだけ。

残滓は残滓に過ぎなくて、余計に傷が深くなるだけだった。

先生は、もういない。

じくじくと疼く痛みを紛らわそうと、未練がましく家を見上げている時に彼と出会ってしまった。

少し、ほんの少しだけ何処となく先生と似ていると感じた男の子。彼に惹かれるまま卑怯な私は流されてしまった。

こんなことまでして。

多分。

きっと。

私は――最低だ。

「……………っ」

身体を揺さぶられる感じがする。遠くから五月蠅い何かが耳へと入ってくる。

「……………世」

鬱陶しい。

「……………っ奈世」

静かにして。

「……伊奈世！」

目を開けると、暗闇だったはずの居間は目も眩むほど明るく照らされていた。

どうしたというんだ。

焦点の定まらない朧な視界は徐々に晴れ、間近に目を捉えた。くりっとした黒い瞳を。

「やっと起きた」

ホッとするような声と少しだけ緩む瞳。

私はいつの間に眠ってしまっていたのだろうか。

「……今、何時？」

寝起き特有の掠れた声が喉から出る。

「七時二十分だよ」

「……そう」

そうか、もう朝なのか。いやそれにしても、早い。早過ぎる。起きるには早過ぎる。

ふらーっと遠のいていく意識を、再び声が繋ぎ止める。

「あっ、コラ！ 寝るな」

人形を扱うように強引に腕を引っ張られ、横になろうとしていたところを無理矢理ソファに座らされる。慣れないところで寝たせいか、身体が痛くてしばらく動けそうもない。

「……寝かせて」

「何言ってるんだよ。遅刻するって」

「……休むから、いい」

「休む……って、俺の方が良くないの！ 楓さんだって今日は来るんだから」

楓さん、誰だっけ。そういえば、昨日もそんなこと言っていたような……。

さすがにこのやりとりのお陰で、まどろみかけていた意識は覚めてしまった。

すっかり身支度の済んでいる彼は、私をじいっと見ている。

テーブルの上には簡単な朝食が二人分用意されていた。

「……これ」

「朝飯。ちゃんと取らないといけないからな……嫌だったら食べなくてもいいんだぞ」

小生意気な口でそれでも薦めているのは、照れ隠しなのだろうか？ そう思うと少し可愛らしい。

「……いただくわ」

「ん」

せっかく作ってくれたものだし、ありがたく頂こう。

「ごちそうさま」

「ごちそうさま」

起き抜けでの朝食の所為か、気持ち悪い。普段食べないから余計に、かもしれない。

そんな私の体調は全く無視されて、急かされるように身支度をしていく。

別に私が急ぐ必要なんて全くないのだけど、なんてぶつくさ文句を言うと彼は睨んでくる。

時計の針が八時を指した頃、私達は先生の家を後にした。

ノーメイクのまま髪だけ梳いた姿で、気だるい通学路を歩いていく。尤も、他の子と違ってメイクなんて殆どしていないようなものだからあまり関係ないのだけれど。

朝。同じ通学路を並んで歩いている高校生と小学生。端から見れば仲の良い姉弟に見えるのかもしれないけれど、実際は違う。

なんてたって、恋人同士ですから。

「あーくんってさ」

「ん？」

「部活、何やっているの？」

「何も」

「そうなんだ」

何で？ と不思議そうに見てくる。やっぱりそういうところに関しては、まだまだ子供だなあ。

「じゃあ、一緒に帰れるね」

「えっ！」

「嫌なの？」

「いやっ、そんなことはないけど……」

「じゃあ、決まりね」

少し嫌そうな顔をしているけれど、恋人同士なら普通にすることだ。それが……例え、お遊びだとしても。

すれ違ったサラリーマンからふわっと漂う臭いは、慣れない朝に忘れてしまっていた、私の中のある欲求を思い出させるには十分だった。意識し始めると堪えるのはもう無理で、衝動に突き動かされるまま鞆の中から取り出して火を付ける。

「ふう……」

胸いっぱい吸い込んで、吐き出す。

スッキリする。早起きの気だるさも、気持ち悪さも、少しは中和されたように感じる。

気持ちいい。……やっぱりこれが無いと、朝は始まらない。

清々しそうにしている私に、隣から刺々しい視線を突き刺してくる。

「何？」

「やめろよ……それ」

指は私の顔、口元の煙草を指す。

「嫌い？」

「別にそうじゃないけど」

「じゃあ、いいじゃない」

「良い訳あるか。高校生でしょ！」

言っている事は尤もだ。だけど、そんなことで私が止めるわけがない。否、止められるわけがない。

煙草の愛しさはそんなに甘くない。

「ああ。そんなの別にどうでもいいよ」

「良くないってば、みんな見てるじゃん！」

私の気にも留めない態度に、少し焦っている彼。確かに彼の言うとおりに、出勤途中のサラリーマンやゴミ出しに来たおばさんが私達をジロジロと見てくる。

「いいよ別に。どうせ見ているだけで……何も言ってこないんだし」

彼等は眉間に皺を寄せ不躰な視線を私に浴びせてくる。何か言いたそうな顔で――でもそれだけ。見てくるだけで、注意しようなんて行動を起こす気はない。

只の傍観者。

情けない。

それでもジロジロ見られて嬉しい訳はなく、私は私を不躰に見てくる他人を見返す。すると、すぐに目を逸らす。ほら、結局はその程度のもの。

大人を舐めるな、なんてことをよく聞くけど、だったら言えればいい。目の前で言えもしないのに、陰で強がるだけなら子供でもできる。

だから私は嫌い。

「でもダメだ、って」

私が油断していた際に煙草はひったくられ捨てられてしまった。

「あぁー。ちょっと何すんの！」

「だから、吸わせないってば」

ふん、と怒ってそっぽを向いてしまった。その仕草はやっぱり子供だ。

吸っているのも悪いのだったら、ポイ捨てだって悪いでしょ。なんて、大人気ないことを言おうとしていたら――ふと、いいことを思いついてしまった。

辺りをきょろきょろと見回して人がいないことを確認すると、彼の頭の位置に顔を持っていく。彼の吃驚する顔が脳裏に浮かんで、つつい顔が弛んでしまいそうになる。

「ふうん。でも一本だけじゃないんだなあ、これが」

「だからあ！ ん……っ……」

私の言葉に反論しようと振り向いた彼の口を、口を使って塞ぐ。素早く両手で彼が逃げられように頭を押さえつける。驚いている彼に、間髪入れずに舌を口腔内へと突っ込んで、弄っていく。歯磨き粉のメンソールの味が舌先に伝わってくる。間近で見た彼はぐるぐると視線を彷徨させた後、大きく目を見開いて暴れ始めた。

それでも構わず頭を押さえつけたまま、歯茎のつるつるしたところや頬の裏を舌でなぞり、彼の舌を吸い絡めていく。

「……っ……」

「……………っっ」

「……んっ、……っ」

「……ぷはっ」

数十秒に満たない時間で彼との初めては、終わった。

悪戯が成功して満足そうな私とは対照的に、距離を少し置いて袖で口元を拭っている彼。

「ぶっ、にがっ……。いきなり何するんだよ、汚いな！」

汚いとは失礼な！

「あーくん。キスも知らないの？」

「知ってるよ、それぐらい。……じゃなくて何で俺にするんだよ！」

「えー。だってあーくんが煙草止めろって言うから、口が寂しいじゃない？」

じゃあガムでも噛んでろ、なんて赤くなってぷりぷりと怒り出した彼を置いて先へ歩いていく。一泡吹かせてやった、そんな満足感で足取りも軽くなる。

徐々にランドセル姿の子供達を見かけるようになってきた。小学校のすぐ傍まで行くと、彼も友達と挨拶を交わしている。明るそうな、元気のいい無邪気な子供達。

これ以上一緒にいてもしょうがないか。

挨拶が途切れたところで、小声で話しかける。

「じゃあ、私行くね」

「ん……ああ。じゃあ」

「あーくん」

「何……」

「待ってるから」

「あー、……うん」

小学校の校門の傍で彼と別れた。

後ろから友達に抱きつかれている彼。きっと、クラスでも慕われているのだろう。

バイバイと小さく手を振ってみたが、楽しそうに笑っている彼は気付くことなく門の中へと入っていった。

それが少し寂しくて、少し羨ましかった。

校門を通り過ぎ、T字路に突き当たる。

さて、左の道へ進めば高校の校門へと続いていく。

右の道に進むと、住宅街に続く。

私は――右の道を歩いていく。

今更高校に行ったところで、何の意味もない。

高校へ向かう学生達の群れに逆らって歩く。見知った顔も何人かいたけれど、誰も私と眼を合わせようとはしない。ヒソヒソと友達同士で、私を見て何か言っているだけ。所詮、そんなものだ。

学生の群れを抜けると、今度は社会人の群れ。正反対の方向に歩いていく学生服の私を見て、時折不愉快な視線を投げかけてくる。

だけど今は、そんなことも大して気にならない。

眠い。夜が遅かったのに朝も早くに起こされて、完全に寝不足だ。

社会人の群れを抜けると、人通りも閑散とした住宅街へと足を踏み入れる。ここは一軒一軒が門を持ち、ある程度の土地を確保している――所謂お金持ちの人間達が暮らす高級住宅街。朝の九時前だと言うのに、動き出す気配のない、どこかずれている世界。

徐々に激しさを増してくる眠気を紛らわせるように、煙草に火を付ける。

「はあ……………」

ここは誰も他人に興味を示さない。

彼と約束した時間まで眠りに付こうと、重い足取りで目的の場所へ向かう。

「あっ……………」

ホントに待っていた。

校門前で制服姿の女の人が立っている。今朝別れた時よりも幾分元気そうな姿で、伊奈世は待っていた。

思わずしてしまった俺の反応に、クラスメイト達は誰誰？ と興味津々、野次馬根性丸出しに訊ねてくる。特に比較的の中の良い女子グループ―その内の一人が、不機嫌そうな顔をして問い詰めてくるのには、驚いた。いつも笑顔で、そんな顔をするような子じゃないのに。

「ねえ、あの人誰？ まさ君の知り合い？ なんてあんなところにいるの？」

「さあ……ただの知り合いだよ」

「ふーん。じゃあ、なんてあんなところで待ってるの？ 知り合いなら、待ってる必要ないんじゃないの？」

何か面倒くさい。一体どうしたんだろうか、この子。

「別に……。気にすることじゃないだろ」

別に俺が誰とどんな関係だって、みんなには関係ないはずだ。

「言ってよ！ 気になるから、聞いているのよ？」

それでも食い下がろうとする女子グループ——といっても一人だけ、を

「関係ないんだから、何でもいいだろ」

と突き放した。

怒った怒った、なんて男子共がからかって女子達は女の子を庇っているけれど、俺は別に怒っている訳でもなんでもない。

ホントに面倒くさいだけなんだ。

ただでさえ面倒くさいことになっているのに、これ以上面倒くさいことが増えるのは好きじゃない。

遠目に一部始終を見ていた伊奈世は、俺が面倒くさそうにしているのに気付いたのか、視線を送ってきてその場を後にした。

伊奈世がいなくなったことですぐに興味を失った彼等は、話題を今日帰ってから何をして遊ぶかに切り替えて盛り上がり始めた。

——助かった。

けっこう強引で図々しくて我儘な伊奈世だけど、そういうところはやっぱり大人なんだなあと思う。

女子グループ——主に一人が、まだ勘繰ったままの顔で納得していないみたいだけれど、何をそんなにムキになるほど気にしているのか分からないので、放って置くことにした。

家の前まで続く通りに差し掛かると、いつものようにクラスメイト達と別れる。

「じゃあ、また明日」

「おう、またなー」

「今度は遊ぼうぜー」

このまま帰るか、とも思ったけれど、一応約束したんだし伊奈世を探しに来た道を引き返すことにした。

遡って歩いているけれど、伊奈世の姿は一向に見つからない。

もう帰っちゃったかな。……大体、なんで俺がこんな面倒くさいことしてんだ。

校門まで戻ってみたけれど、伊奈世の姿はなかった。

さすがに待てなくて帰ってしまったかな。



帰るか。

家に帰ろうと再び引き返したところで、後ろから誰かが抱きついてきた。

「わっ！」

「うわぁ……って、重い！」

予想もしないランドセルの重みにひっくり返りそうになる。思わず呟くと、スッと軽くなった

。

「失礼ね。重くないよ」

「いや、……重かったって」

振り返ると、少しだけムツとした顔の伊奈世が腕を組んでいた。

「女の子に言うことじゃないよ、それ。まあいいわ、未発達のお子様ほど軽くないだけだし……

」

「ん？ なんだよ、それ」

「さっきのお返し」

大人気ない、と言いたいところだけれど、その言葉は飲み込んだ。理由は何にしる、待たせてしまったのは俺なんだから。

「じゃあ、一緒に帰ろ」

「ん」

一緒に言いながら、先へ歩いて行くのはどういう了見だ。

少しだけ駆けて伊奈世の隣に並ぶ。

「……………」

「……………」

特に話すことも見つからず、無言のまま俺の家までの帰り道を歩いている。でも今日は楓さんが家で待っているから、伊奈世を入れることはできない。昨日とは、違う。

……………。

一緒に寝たことを思い出してしまい、恥ずかしくなった。

それを誤魔化すように、伊奈世の細くて冷たい手を握る。ビックリしたようにこっちを見た伊奈世だったけれど、前を向くとギュッと手を握り返してきた。

「……………」

「……………」

ちらっと横顔を盗み見ると、こころなしか少し嬉しそうだ。

だから俺は、少しだけ寄り道をしようと思った。

付き合う、付き合わない、とか、彼氏彼女、がどうとか言われても具体的に何をしたらいいかわからないけれど、少くく話をする時間があってもいいんじゃないかと思う。折角待っていてくれたんだし、一応、恋人同士ということなんだから。

家の前へ続く道を通り過ぎて、クラスメイトにも知り合いにも見つからない、とっておきの秘密の場所へ向かうことにした。

家を通り過ぎた俺に伊奈世は少し不思議そうな顔をしたけれど、何も言わず歩いてくれる。

「……………」

「……………」

川原が見えてきた。

俺も伊奈世も川原で腰を落ち着かせるまで、手を繋いだまま一言も喋ることはなかった。

雑草生い茂る川原の中の小さな空き地。長く伸びた草の壁が周りをぐるりと囲み、絶妙に川原の上から見つけることができなくなっている、秘密の場所だ。

「ねえ」

草の壁を背に二人で川を眺めている。時折吹く風が草を揺らし、さわさわと葉が擦れ合い小気味よい音を立てる。

「何？」

伊奈世はじっと川を見ていて、俺の方は見ない。川を見ているようなその瞳は、ホントに川を見ているのかはわからなかった。彼女のその無表情にも近い顔は、昨日から見ているどの顔とも違って人形のように。

” 落花 ”

昔、親父の書斎で読んだ本の言葉が浮かんできた。

見蕩れている場合じゃない。訊いておかないと。

「何で俺と付き合うの？」

「……………」

答えに困っているのだろうか、しばらく沈黙が続く。

「……………」

「……………」

川を、どこか遠くを見たままゆっくりと口を開いた。

「好きだ、と思ったから」

「会って、一日も経ってないのに？」

「……変？」

「変ってそりゃあ。……よくわかんないけどさ、そういうのって時間かけてなるもんじゃないの？」

好きだの付き合うだの、そんなものはドラマとかマンガで見たことぐらいしかわからない。クラスでも話には上がるけど、正直苦手で加わらなかった。

全く無縁のものだ。

そんな俺でも今の状態が変なことぐらいわかる。

「君のことは知ってたよ」

「えっ？」

「辰彦っ……倉科先生から、聞いてたから」

少しだけ目を細めた、また違う初めて見る伊奈世の表情。親父の話をするとき、伊奈世は何か違う気がする。それがなんなのかと聞かれても、答えることのできない直感的なもの。

けれどそれを俺は、好ましく思えない。

「それで、昨日会って……一目惚れした」

「そっか」

「……………」

「……………」

伊奈世が俺を見る。未だ夕陽は射して明るいはずなのに、その顔はどこか翳りを持っていて”暗い”と感じてしまう。

「私からも訊くけど」

「ん？」

「さっき、時間をかけるものじゃないのかって言ったけど。じゃあ、なんでOKしたの？」

確かに。

なぜ俺は、うんと言ったんだろう。その日会うまで全く知らなかった赤の他人。今でも名前以外に何にも知らない伊奈世の誘いに、なんで乗ってしまったのだろうか。

俺と伊奈世の繋がりなんて、親父だけなのに。

——親父？

「……………」

「……………」

彼女が親父を知っているから？

それなら別に伊奈世以外にもたくさんいるはずだ。

彼女が親父のことを慕っているから？

確かに嬉しいけど、たまたま伊奈世が来た、ってだけじゃないか。

彼女が親父のことを好きだから？

親父のことを好きだっていう理由で、俺がその娘を好きになるって変だ。そもそも好きかも分からないのに。

親父と付き合いっていたかも知れないから？

それこそ可笑しい話だ。親父と付き合いしているのに、俺が付き合おうとするなんて……。

じゃあ、何で？

ぐるぐると頭の中で、自問自答を繰り返す。きっと、さっきの伊奈世もこんな感じだったのだろうか。彼女は催促することもなく、じいっと俺を見ている。

理由を探している内に、寂しそうにみえた伊奈世、弱々しくみえた伊奈世、無表情で儂げな伊奈世の顔が浮かんできた。

守ってあげたい。

歳だってかなり違う、腕力だってそんなに自信がある訳でもない。それでも、そんな表情をする彼女のことをそう思った。もしかして、それが好きってことなのだろうか。確信はないけれど、俺が初めて触れた名前のない気持ち。だったら、そう名付けても悪くはないのかもしれない。

「好き、だからかな」

「そう」

俺の答えを聞いてひどく傷ついたように一瞬、少しだけ顔を歪めた……気がした。

勘違いだろう。

けれどそれを見た俺は、胸が波打つのが感じた。

「……伊奈世」

「何？」

「俺、伊奈世のこと何も知らない」

「……そうだね」

伊奈世に俺は優しく包まれるように抱かれた。俺は彼女に、彼女は俺に、お互い背中に手を回して身体を預け合う。俺は彼女を見上げ、伊奈世は俺を見下ろす。

心臓は落ち着かないのに、心は安らぐ。

「教えてよ」

「いいよ」

ごく自然で当たり前のように、顔を近付ける。間近で見る伊奈世の顔。改めて見ても綺麗だと思ふ。

「……………」

「……………」

二度目は、苦くはなかった。

多分この日。

恋人同士の他人は、恋人同士に変わったのだと思う。

俺の初めて出来た、四人目の大切な人。

枝に縋りついていた枯葉は去り、白い木の葉がはらはらと地面へ積み重なる十二月。

伊奈世と本当の意味で付き合い出して半年以上が過ぎた。

あの日、川原で交わしたたくさんの話を境に、俺は彼女に惚れてしまったのだと思う。

周りから見ればママゴトをしているような恋人同士。いや、恋人同士としても見られていないと思うけれど、俺は大切な人と一緒にいられて幸せだった。

毎日一緒に通学して、帰りは公園や秘密の川原で寄り道をする。休みの日は伊奈世の買い物に付き合ったり、どこか遠くに遊びに行ったり。帰りが遅くなると楓さんに怒られて、煙草の臭いがすると怪しまれた。

楓さんが帰った後にまた逢うのも、日課となりつつある。

その内、楓さんに付き合っている事がバレてしまい、相手が誰なのかと問い詰められた。観念して紹介したけれど、付き合うのは止めておきなさい、なんて言われて初めて喧嘩した。

喧嘩になったことを申し訳なさそうにしている伊奈世だったが、別に彼女が悪い訳ではない。

一ヶ月に及んだ大喧嘩の末、楓さんが折れて仲直りをした。未だに伊奈世のことは認めてくれないけれど、付き合っていること自体に口出ししてくることはなくなった。

伊奈世のことを楓さんに理解してもらって仲良くしてもらいたいと思うのが、今、俺の目標の一つでもある。

そんなことを伊奈世に話すと、私は別にいいのに、と笑う。

それは俺が良くない。楓さんも、伊奈世も、俺にとって大切な人だ、だから仲良くして欲しい。

「あーくんは幸せだね」

笑いながら言われた。

細やかな毎日の積み重ね——その一日毎に、俺の好きだと思える気持ちは募っていつている。

でも、それと同時に俺の中で伊奈世に対する不安も深くなっていった。不信感とでも言うのだろうか。伊奈世と逢えば逢うほど、一緒にいればいるほど、その気持ちはどんどん濃く深くなっていく。

伊奈世は笑っていないのだ。

出逢った時から今日まで、伊奈世はたくさん笑っている。他愛のないテレビ番組だったり、街中でたまたま見た人のおかしな挙動だったり、そんな些細なことで笑い合っていた。最初こそ、表情の変化が乏しい怖い顔ばかりする人だと思っていたけれど、仲良くなればなるほど喜怒哀楽がコロコロと目まぐるしく変わる、表情豊かな可愛い人だというのが分かった。

けれど、時折思ってしまう。

喜んでは笑い、怒っては笑い、哀しんでは笑い、楽しそうに笑う彼女だけど、そのどれもがホントに心の底から笑っているのだろうか、と。

一度だけ覗き見た親父とのツーショット写真。

彼女が大事に持っていたその写真の笑顔は、どれにも似ていなかった。

俺に見せていたどの笑顔とも違う、彼女の笑顔。

伊奈世は笑っていないのだと思う。

それにもう一つ。伊奈世が俺を見るとき、時折違うものを見ている気がする。気になって一度聞いてみたこともあったけれど、気のせいだよ、と笑って一蹴されてしまった。それでも、俺を見て俺じゃない何かを見出している感覚は変わらず、もしかすると伊奈世はまだ親父のことが好きなのではないか？ 俺と付き合っているのは、親父の代替品としてではないのか？ そう思ってしまう。

そんな自分が嫌になる。

決して打ち明けられない俺の秘密、その考えは日増しに強く大きくなっていく。

好きになればなるほど、その思いは濃く深く刻まれていった。

「あーくん……」

伊奈世が俺を見つけたようだ。

深緑色のニット帽と薄黄色のマフラーに茶色のダウンジャケット、デニム地の濃紺ミニスカートに緑のカラータイツと茶色のブーツ。この頃、遊びに行く時に私服を着るようになった伊奈世は、制服とはまた違った女性らしさがあると思う。

「お待たせ」

足元に落ちている数本の吸い殻。少し待たせてしまったみたいだった。

行こう、と伊奈世の手を取り歩く。

辺りは暗く、時刻は九時を回っている。

最近楓さんには夕食を作ってもらったら帰ってもらうようにしている。

夜でも伊奈世と一緒にいたい、という打算的な部分もあるのだけど、それ以上に楓さんにもイイ人が出来て幸せになって欲しい、そう思うようになったから。いつまでも俺みたいな子供のお守りばかりをしてもらうのは、申し訳ないから。

吐く息は白く漂い、雪がふわりふわりと地面を白く埋めていく。日毎に増す寒さの中、それでも俺達は飽きもせず、逢っては何する事なくぶらぶらと散歩を試みたり、家の中でまったりとしていた。

およそ小学生らしからぬことばかりしている俺は、もうそんな事を気にする価値観はとっくの昔に麻痺してしまっていた。

「寒いね」

「ああ、寒くなったね」

他愛ない会話。手を繋いで大切な人と歩いているだけで、とても愛おしい大切な時間になる。

雪が音を吸い込み、しんと静まり返っている夜道は、その静寂を破ってしまっはいけないように思えて、互いに口数を少なくしてしまう。

でも、元々話上手ではない俺にはそれぐらいで丁度良いと思う。

大通りに出ると、降り続く雪の所為か人通りは殆どなくなっている。対照的に車の交通量はまだまだ多い。通り沿いに続く曲線を描いた橋の真ん中で、俺達は足を止めた。

そこから覗く川は、昼と夜とで大違いだ。

昼間見ると浅い底と光の反射で水面が白く輝いて見える、それが冬の夜にもなると真っ黒で底が見えない、まるで底なし沼のようだと錯覚してしまう。

隣を見ると、手摺りに積もった雪を除けて、伊奈世はぼおーっと吸い込まれるように川を見ている。底を見つけようとしているのだろうか。

”落花”の言葉が似合う、儂げな表情。

伊奈世と付き合ってから度々目にする、何も無いところに何かを求めているような表情。求めているようでいて、諦めているような無表情の人形みたいな顔。本人も自覚はないようで、無意識にする危うさのある表情を、俺は落ち着かない気持ちで見ているしかない。

でも、やっぱり俺は、我慢できなさそうだ。

「ねえ、伊奈世」

「何？」

こちらを向いた時には、その表情は既に消えてしまっている。無意識なのは間違いないだろう。

「落花って、言葉知ってる？」

「落下……？」

「ううん、落花。落ちるに花、と書くんだけど……………丁度あんな感じかな」

視界の端で見つけた、川原沿いの並木。木の葉の代わりに、街灯に照らされた雪が枝をくぐり、はらりふわりと川の中へと落ちていく。

「なんだか、寂しい気持ちになる……」

「うん。落花は、離別や死を匂わせる言葉なんだ」

その言葉に、少しだけ伊奈世の顔が強張る。

伊奈世も自分自身、薄々気付いていたのだろうか。

「でもね……」

「……………」

「ああやって川の中に入っていくでしょ？ その様を落花流水って言うんだ。落ちる花に流れる水。この場合、雪の花びらと川かな」

「……………」

伊奈世からの相槌が消える。

それでも俺は止めない。決めたから。

「するとね、さっきまでの悲しそうな意味は、全く違うものになるんだ」

「……………」

「……………」

ここから先、彼女が聞きたいかどうかに委ねる。一方的に伝えても意味はない。

聞こうか、聞かないか、小さく薄く切り替わる表情。やがて、決心したように彼女は口を開いた。

「……どんな、意味？」

少しだけホッとする。

「うん。落ちた花びらは流れる水に浮かびたい。流れる水は落ちる花びらを浮かべて流りたいという気持ちがある、そういう風に思った人がいてね」

「綺麗な言葉……だね」

「うん。俺も結構好きな言葉なんだ。落花流水……………その言葉が意味するのは、男に女を慕う心があれば、女もまた情が生じて男を受け入れる。つまりは、相思相愛になるってことなんだ」

彼女が ” 落花 ” だとするならば、俺は ” 流水 ” になれるのだろうか。

言葉の意味する事が伝わったのか、伝わらないのか、伊奈世は俺をじっと見ている。

俺も視線を外すこと無く真っ直ぐに受け止める。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「寒くなってきたね……そろそろ行こう」

「あ。うん……」

伊奈世は先へ歩いて行ってしまった。

振り返ることなく、俺との距離を一定に保つ。

流されてしまったのだろうか？ 彼女の後姿からはそれを伺い知ることはできない。

届いていてくれ、と試してみたところで彼女の後姿は変わることなく、過ぎた時間と歩いた距離だけが増えていく。

橋を越え、大通り沿いにしばらく歩いたところで、国道と交わる交差点に着いた。時間もだいぶ経ち、徐々に車の交通量は少なくなっている。

赤信号で足を止めている間も伊奈世は振り向くことはなかった。

「……………」

「……………」

決めたんだ。

もう受身でいることは、止めるって。

たとえ伊奈世が望んでいなくても、俺はハッキリさせたい。俺の気持ち、伊奈世の気持ち、俺達と一緒にいる意味……。

今しかない。問える声を隠して、伊奈世の後姿にかける。

「伊奈世」



「……何」

伊奈世は手を後ろに組んで遠くを見ている。その姿は逃げているようにも思えて、伊奈世が一体何から逃げようとしているんだ、と考えてしまう。

「さっきの話だけどさ、伊奈世はどう思う？」

「……………」

「……………」

「……………」

返ってこない。それで、俺の心は決まった。

「俺さ……伊奈世と付き合うことができて楽しい。幸せだよ。始めはびっくりしたけれど、寂しい毎日から連れ出してくれて、嬉しかった。だけどさ、だけど、どうしても不安になることが一つあるんだ。多分初めて会った時から今までずっと、……聞けなかったことが、ある」

「……………っ」

肩が、ぴくんと動いた気がする。

「伊奈世は俺のことが好きなんだよね？」

「……うん」

「伊奈世はさ、親父と付き合ってたの？ 伊奈世はホントに俺のことが好きなの？ それともまだ……………親父なの？」

束の間の幸せ。俺はそれを自らの手で壊したのかもしれない。でも、それでも、大切な人に嘘を付いたままいたくない。

疑ったまま過ごして行くには、先は長過ぎる。

「……………」

「……………」

「……………」

返事はやっぱり返ってこない。

伊奈世はずっと前を向いたまま立っている。信号が青に変わっても動こうとしない。

何を考えているのか、どんな顔をしているのか。何も分からないまま俺は彼女の後姿をじっと見ている。

「……………」

「……………」

無言の回答。

青信号は再び、赤に切り替わった。

多分、それが彼女の答えなのだろう。

俺は、まるで後ろにもう一人自分がいて、他人事のように一部始終を見ていたような感覚に囚われた。ぐるぐると纏まらない考えで一杯だった頭の中は、濾過したようにスッキリと醒めた。

自分のことなのに、他人事だ。

二回目の青信号。

凍りついたままの意識と身体。

無意識のうちに手だけが伸びていた。

ただ、真っ直ぐに。

彼女の後姿だけが俺の全てを支配している。

反射的に振り返る伊奈世。

俺と目が合う。

彼女は眉を寄せた、少し困ったような顔で初めて笑ってくれたような気がした。憑き物が落ちたみたいな、柔らかく優しい笑顔。

何かを言おうと形作る唇は、けれど声を発することはなかった。

最後に見た彼女の表情。

前へと押し出た身体は、左へと、飛んだ。

跳んだのでも、翔んだのでもなく、飛んだ。

どん、と鈍い音と共に、飛んだ。

空中に弧を描いて、糸の切れた操り人形のように四肢をあらゆる方向に投げ出して墜ちた。

街灯と車のライトに照らされた彼女。”落花”のように、白紙に散った紅い花卉。

その中心で、地面に伏していた。

ぴくり、とも動かない彼女。

俺の目に焼き付いた、初めて。

遠くで聞こえる誰かの声と近づくサイレン。

俺の肩を揺さぶり何かを喋っている誰か。

明滅する赤と、浸食される白、包み込む黒。

じわじわと広がる赤と、降り注ぐ白、蠢く黒。

赤と白と黒の世界。

朧な視界の中で、それだけが印象的だった。

俺は一人を殺してしまった。

黒いアスファルトを真っ白に染め上げ、隠れていたものが明るい夜に照らされる十二月。

俺は大切だ、と言っていた人を、殺してしまった。

気が付いた。

気が付いた、というのはこの状況で正しい表現なのだろうか？

目を瞑っているとき、段々とまどろんでいく意識に近いのかもしれない。かもしれないのは、その境界線が曖昧で解らないから。

いつから気が付いているのか、それともまだ寝ているのか。現実なのか、夢の中なのか。

分かるのは、私が私自身を認識できている、ということだけ。

では、私は今何をしています？

覚えがない。それに真っ暗で何も見えない。

部屋を真っ暗にした記憶はないのに。いや、そもそも記憶自体曖昧で……私は部屋にいたのだろうか？ ここがどこかと周りを見回しても、右も左も上も下も前も後ろも、全て真っ黒に塗り潰された暗闇だけが広がっている。

とにかく、明かりを付けない事にはどうしようもない。何も見えないんだから。

ここが私の部屋だとしたら扉のすぐ傍にスイッチがある。

……………。

……………。

何も起きない。

スイッチを押しに行こうと起き上がる———何も起きなかった。

手がぴくりとも動かない。いや、手だけじゃない。身体全てが石にでもなったかのように動くことの一切を拒んでいる。意識はある——はずなのに、手とか足とか身体感覚が朧で感じられない。長時間の正座で足が痺れた時のように、とても鈍い。

何、で？

意味が分からない。

とりあえず、誰か呼ばないと。

「—————」

叫んでみたのに何処にも届かない。声を出したくても、口が動かなかった。喉が動かない。身体と一緒にだ。

何で？

「—————」

どうして！

「—————」

怖い。

「—————、—————」

いくら叫んでも、いくら動こうとしても、いくら思っても、何も変わらない。今すぐにでも吐き出したいのに、身体は嘔吐することさえ許してくれない。

「—————」

どれだけの時間が経ったのだろうか。

真っ暗闇の中、時間を確かめる術はない。そもそも時間を確かめてどうしようと言うのだろうか、何も出来ないのに。

私は気付かないうちに気絶していたようだ。もっとも、今も未だ気絶して夢の中にいるのかもしれない。

延々と見続けるしかない暗闇に、頭はぼおっと靄がかかったように考えることも少なくなっていく。

それどころか、この暗闇は見ているものなのか、今本当に目を開けて見ているのかどうかすら分からない。

何も見えない。

何も感じない。

何も聞こえない。

何も出来ない。

何も分からない。

何も……、何も……、何も……。

何も分からないまま暗闇にいる恐怖にじくじくと蝕まれ、思考だけでなく心も止まっていく。氷の張った湖の底に落ちていくように、冷たく固まって止まっていく。

誰か……、……助けて。

「———、———」

最後の叫びが止まった。

後に残ったのは、身体だけ。ふよふよと波の上に浮かんでいるような浮遊感。

身体を動かそうとすることも、声を出そうとすることも、考えようとするのも、もうない。ただ、闇の中を浮かぶ漂流物のよう。

それでも、ずうっと闇だけを見ていて解ったことが一つある。闇は黒であっても真っ黒ではない、黒の中には無数に蠢く黒がある。一見その場に留まっているように見える黒は流れていたり、何かを形作っているようにも見える。形容し難いそれは、うねうねと流れ、ぐるぐるとぶつかり、瞬間瞬間で形を変え、私に何かを思い出させようとしているみたい。生物の永い歴史を垣間見せるかのように、小さくなったり大きくなったり、横長く縦長く、目まぐるしく切り替わる黒は、最終的にある一つのものに辿り着いた。

眼の前に形作られたそれを見て、私の止まっていた思考と心は息を吹き返した。

——辰彦先生。

ゆらゆらと闇の波の中を揺らいでいる。俯いていて顔の表情まで解らないが、背格好といい、雰囲気といい、辰彦先生そのものだった。

近寄って抱きしめたい、いっぱい言葉を交わしたい、いっぱい声がききたい、あの温もりと匂いを感じたい。

濁流のように湧き上がる気持ち。

でも、いくらそう思っても身体は言うことを聞いてくれない。

欲しくて欲しくてたまらない人が目の前にいるのに――ただ見ていることしか出来ない。そんな自分が悔しくて、でも涙を流すこともできない。

辰彦先生、辰彦先生、辰彦先生、辰彦先生、辰彦先生、辰彦先生、辰彦先生、辰彦先生……………。

逢いたかった、会いたかった、遇いたかった、遭いたかった。あいたかったよ。

心の中でどれほど呟いても、どれほど泣いても、目の前にいる人に伝わらない。こんなにも近い距離にいるのに、どこまでも遠い。

辰彦先生は辰彦先生で揺れているだけ。

髪の毛は寝癖に寝癖を重ねたようにボサボサに跳ねており、服装も汚れて、破れて、乱れている。頬はこけ、日に焼けていた肌は青白く土気色。かけていた眼鏡も左のレンズが割れている。

。

一体先生の身に何があったのだろうか。でも、それを聞くこともできない。

横たわった私と立ったままの辰彦先生。

「―――」

もう何回目だろう、私は泣くことしか知らない赤ん坊のように叫び続けていた。

届くことのない叫び。叫び続けることが無駄なんだと実感する度に、私の心は摩耗していく。

それでももう一度、もう一度、もしかしたらと、叫ぶことを止められないでいる。

辰彦先生。

「―――」

辰彦先生。

「―――」

辰彦先生。

「―――」

「……………」

反応した。反応した、ようにみえた。

揺れて立ち尽くすだけの辰彦先生が顔を上げた。焦点が合わないのか、臍に私の方を見ている。

。

辰彦先生。私です、伊奈世です。

こけた頬で、隈の濃い顔で、笑いかけられた。元気のない疲れた笑みだけど、辰彦先生の笑顔だ。

応えてくれた。辰彦先生が、応えてくれた。伝わったんだ。

言葉は出せていない。言葉も返ってこない。でも、不思議なことに私の言葉は辰彦先生に伝わっている。まるでテレパシーか何かに目覚めたように。

辰彦先生。辰彦先生はいつ帰ってきたの？ 何でいなくなったの？

「……………」

ねえ辰彦先生。私ね、聞いてほしいことがあるの……………。

「……………」

辰彦先生は微笑んだまま私を見ているだけ。言葉はなく、時折ずれる眼鏡を右手でかけなおすだけ。

でも、辰彦先生は辰彦先生。仕草も辰彦先生のままだ。

私はぶつめた、辰彦先生に全てを。またいなくなってしまうかもしれないのが怖くて。自分が変わってしまっていくことが怖くて。

「……………」

全てを話した私に、それでも辰彦先生は微笑んでいた。困るでも怒るでも悲しむでもなく、微笑んでいた。何か言ってくれるのではないかと、じっと待っていても何も言ってくれなかった。変わりに辰彦先生は右手を横に伸ばした。指先は何かを示すように指していて、その先には針先のような小さな光が見える。

それが何を意味しているのか、考える間もなく辰彦先生は言葉を発した。

「……………、……………。おやすみ」

先生の声聞いて、私の意識は急速に遠のいていく。小さな光に吸い込まれるように意識が消えていく。突然過ぎることに待っても言えずに、ぐらりぐらりと辰彦先生が歪んで、振れて、闇の中に溶けていった。

「—————」

気が付くと、目の前に辰彦先生の姿はなく、小さな光もなく、元の闇だけの黒い世界だった。

辰彦先生の姿を探そうにも、どこにも何の痕跡もない。

辰彦先生。

「———」

私の叫びも届かない。

中途半端に辰彦先生と逢ってしまい、余計にこの場所にいることがつらくなってしまった。

これが辰彦先生の答えなんだ、と思うと、出ないはずの涙が止まらなかった。

泣いて、鳴いて、啼いて、ないて、ナイテ。

泣き疲れて、落ち込んで、泣いて、再び止まっていく。

今度は、もう戻れそうもない。

「……………。……………、……………」

止まっていこうとする意識の中で、微かだけれど私の耳が音を捉えた。

何かが聞こえる。

「……………、……………」

何の音かはわからないけれど、それが止まることを停めた。一定の周期で私の耳に届くそれは、時には違う音と音とが複数個交ざって聞こえてくることもある。大きい音や小さい音、低い音や高い音、同じ音でも同じ音は殆どない。

相変わらずそれが何の音なのかわからない。

「……………。……………。……………」

ああ。また、音が始まった。

よく分からない音だけど、不思議と嫌な感じはしない。

私は耳を傾けていた。

いつの間にか、この暗闇の中それが投げ所となっていた。

コンコン。

ノックを二回。

「入るよ」

声には何も返ってこない。

ベッドで眠り続ける伊奈世。

小さな棚の上には一昨日買った花が活けてあり、ベッドの傍に医療器具が数点置かれているだけ。

いつ見ても思う、簡素な病室。

「やあ、元気だったかい？」

ベッド脇の折り畳み椅子に座ると、彼女の頭を撫でる。絹のように艶のあるさらりとした感触は、全く変わらない。痩せたというよりも、こけた青白い頬はいつもより、ほんのり赤みを帯びているように感じる。

「今日は少し顔色がいいね」

入院着から覗く枯れ枝を思わせる腕。八年間使わなかっただけで、人の筋肉はこんなにも萎縮してしまうものなのか。

それも……そうかもしれない。

八年の年月は彼女だけでなく、彼女の周りを変えてしまうのに十分過ぎる時間だった。

俺が彼女を殺そうとした日。

伊奈世が意識不明の重体で運ばれた病院先、そこで初めて彼女の両親と会った。

彼女が手術を受けている扉の前で、二人は人目も気にせず互いを罵り合っていた。自分の娘が生死の境を彷徨っているというのに、だ。彼等は互いに責任を擦りつけ合っているだけで、彼女の無事を祈ることもしない。

伊奈世が自分の話をしたがらない理由が少し分かった気がした。

そんな周りのことは関係なく、手術は無事に成功した。

頭には包帯が巻かれ、身体のいたるところからコードの伸びた伊奈世。眠ったまま面会謝絶が解かれた後も、彼女が目覚めることはなかった。

医師が言うには、手術自体は成功していて身体は治っている。ただ頭部を強打しているので、いつ意識が戻るかは分からないそうだ。医師の言葉通り、半月経っても半年経っても眠ったまま。まるで目覚めることを拒んでいるようにも思える。

彼女の両親は娘の意識が戻らないことを知ると、すぐに離婚した。

父親側に引き取られた彼女だったが、入院費を払い続けるだけでこの八年間、一度も顔を見せることはなかった。

多分、これからも顔を見せることはないのだろう。

形だけの家族。

自分の家なのに居場所の無かった伊奈世は、自分の知らない内に、居場所が無い居場所を永遠に失ってしまった。

俺のせいだ。俺がトドメを刺したのだ。

何も知らずに眠り続けている伊奈世。

彼女の無表情な寝顔を見ていると、いっそこのまま眠り続けている方が幸せなのではないか？

そんなことまで思えてしまう。

「伊奈世。俺も君に並んだよ」

伊奈世の停まった時間に、追いついた。

あの頃追い付きそうだった背丈は、今では二十センチくらい差を付けている。

もし、今君が目目を覚ましたら――何を思うだろうか。

幼さの無くなった俺を見て気付いてくれるだろうか？

自分をこんな目に合わせた俺が目の前にいて、心の底から憎むのだろうか？

それとも、それすら憶えていないのだろうか？

どっちにしろ、彼女の中にいた俺は

――もういない。

あの事件の後、俺は捕まらなかった。

警察の人間は事故の状況を俺に訊きに来ていたが、俺は自分のやった事が怖くて何も話すことが出来なかった。それをどう捉えたのか分からなかったが、彼女を撥ねてしまった運転手が飲酒運転のうえに赤信号無視、スピード超過にノーブレーキだったことも大きく働いて、運転手の危険運転致死傷罪として事件は片付けられてしまった。

俺は、卑怯で汚い人間だ。

彼女をこんな目に遭わしたのに、俺だけのうのうと生きているなんて。

「じゃあ、また明日来るね」



俺の周りも大きく変わってしまったが、見舞いだけは欠かさず来ている。

それが贖罪になるとは思えない。ただ、彼女が目を覚ましたときに傍にいたかった。

目が覚めた彼女に罵倒されようとしているのか、俺の罪を罰して欲しいと思っているのか。

それでも俺は、もう一度目を覚ました彼女に逢いたかった。

「……………、……………」

また低い音が聞こえてくる。

ずうっと聞いている内に、なぜだかそれを、私は暖かいと感じていた。

知りたい。

その音が何なのか。私は知りたい。

自分の意思から外れてしまった身体。もう一度身体が言うことを聞いてくれるのなら、その音が何なのかを確かめたいと思う。

動かない身体、出せない声、朧な視界、混濁していく意識の中で数え切れないほど聞こえた音

。

そのうちに音の正体が声なのだと知る。

中身は何一つ分からないけれど、その低い声は私がこの暗闇から抜け出すのを待っているように思えた。

——そんなの一人しか、いない。

私の十八年の人生。

その中で、私に一生懸命だったのは一人だけ。

私の中の罪悪感、その一つだけ。

彼のことを思い出す度、濁っていく私が少しだけ澄んで、昏くなっていく気がする。思い出そう。暗闇に融けてしまう私を繋ぎ止める為に、それだけでこの停滞した暗闇から抜け出せる気がする。

あーくん。

生意気で大人になろうと背伸びして無愛想だけれど、辰彦先生と同じ位優しい彼。辰彦先生と違って、私に必死だった彼。

初めて私のことを大事に思ってくれた辰彦先生がいなくなって、ぽっかりと空いた穴を塞ぐことも出来ずに彷徨っていた私。そんな私穴に、楽しさを、喜びを詰め込んでくれた。

毎日一緒に居てくれて、遊んで、寝て、笑って。

幸せだった。気が付くとそれに甘えてしまっていた。

彼の気持ちを感じる度に、私は彼を真っ直ぐ見られなくなってしまう。

偶然出会った彼を利用して、彼の気持ちも利用して、私は救われていた気がする。

先生がいつか帰って来るんじゃないかって我慢して。でも帰って来なかった。時間が経つにつれ、一緒に居る時間が増えていくにつれて、私の中で彼の存在は大きく膨らんでいった。

取り返しがつかなくなった。

先生以上に彼のことを考えてしまう。

でも、それを表面に出すことはできない。先生を裏切っているから、彼の気持ちを知っていて踏み躪っているから、それがばれてしまうんじゃないかって、怖くて。

そういえば、あの時もそう。

雪がはらはらと舞い落ちてくる夜。

二人で並んで見ていた川。

日に日に変化していく気持ちに嘘をつくことができなくなってきて、先生に何て言えば、彼に何て言えばいいか、解らなかった。

そんな時に彼の口から出た、プロポーズとも取れなく無い彼の言葉。綺麗な言葉。

嬉しかった。

その言葉が理想に過ぎない幼い気持ちでも、十二分に嬉しかった。

でも、答えることはできない。

彼の言葉に、想いに応えたかった。

でも、それはできない。それをしてしまったら先生はどうなるの？ 今先生のことを考えているのなんて、私か彼ぐらい。ここで私が彼に答えてしまったら、きっと私は先生のことを考えなくなってしまう。

それが怖い……。

黙り続けている私に、一瞬見せた彼の寂しそうな顔。それを見るのが辛かった。でも、私の優柔不断さが招いたことだ。

無言で微妙な空気のまま歩いた二人。

信号待ちでかけられた問い。

先生か彼か。

答えは決まっている。

彼だ。

でも言えない。

絶対に言えない。

それで……、それから、それから……………。

……あれ？

それから、どうしたんだっけ？ 覚えがない。

何故だろう……………あの時からこの暗闇にいるまでの記憶がない。線がぷつぷつと切れているように繋がっていない。

この暗闇のような空白。いや、空黒。

「……………、……………」

思い出そう。

あーくんの音を聞きながら。

思い出そう。

この音さえあれば、暗闇に融けてしまわないだろうから。

「こんにちは」

「こんにちは、倉科さん」

カウンター越しに挨拶を交わし、通り過ぎていく。

受付の横の階段を上っていくと、正面から見覚えのある顔が歩いてきた。

向こうも気が付いたようで、声を上げる。

「あら？」

「どうも」

「どうしたの？ 何処か悪いの？」

白衣姿の彼女は、この病院の先生らしかった。

そういえば、心理療法士とかなんとか言ってたっけ。

「いや、知り合いのお見舞いです」

「そう。そうなの。……あつ、この前はお世話になったわね、ありがとう」

少し恥ずかしそうな表情で笑う。

そう、この前介抱した酔っ払いの女性だ。結局途中で起きた彼女と、……仕方なく家で飲み直す羽目になり……………。

「いえ、俺も大した事はしてないですから」

「ふふふ。私もごめんね、君が固い子だとは思わなかったから」

「……いや、まあ」

意地悪そうに笑う。

人を襲っておいて何を言うんだか。未遂で済んだからよかったものの。

「……っと、じゃあそろそろ行くわね。また飲みましょ。その時こそ、ね」

「……じゃあ、また」

俺の横を通り抜け、カツカツと階段を降りて行く。振り返ると、彼女は視界から見えなくなるまでバイバイと手を振っていた。

最後の言葉と含み笑いに嫌なものを感じてしょうがない。気を付けよう。

名前も知らない彼女と別れて、伊奈世のいる病室へ向かう。

少しだけ思い出せた。

断片的にはあるけれど、信号待ちの後のことを……。

……………。

……………。

そっか、私は彼に……。

……………。

……………非道いなあ、……。

……………。

じゃあ、私はあの時の……。

……………。

目の前の闇が薄れ始めた。

あんなに頑なだった暗闇が反転していく。

コンコン。

ノックを二回。

「入るよ」

部屋にぽつんとあるベッドで伊奈世が眠っている。

ベッド脇の折り畳み椅子に座ると、彼女の顔を何となく覗き込んだ。日を増して、肌の色は良くなっていく。

もしかしたら、数ヵ月後には目を覚ますのではないか？ そんな期待が膨らんでいく。

「伊奈世。だんだん元気になってるみたいだね。いつ目を覚ましてくれるのかな？」

いつものように語り掛ける。

目が、うっすらと開いた。

私の名前を呼ぶ声が、聞こえた。

伊奈世が————目を覚ました。

男の人の顔。……先、生？ いや、先生よりも若い。もしかして——。

焦点の合っていない瞳が必死に俺の顔を捉えようとしている。俺はあまりの唐突な出来事に呼吸すら忘れてしまった。

「……………、……」

唇がゆっくり動く。一生懸命何かを言おうとしているが、長年出していなかった声帯からは息が漏れるだけ。

声が、出ない。あの暗闇の中にいたときのように声が出せない。

顔を必死に歪ませて、声を上げているけれど聞こえない。何を言おうとしているのだろう。

「……………あ」

何度も何度も繰り返して、ようやくか細い音が聞こえた。八年振りの声の欠片。

「……………ん」

「うん、何？」

声を出す。ただそれだけのことが、まるで氷を人肌で溶かすように時間のかかることだった。

少しずつ聞こえてくる音は声の体裁を成して、耳に届いてきた。

「……あ……ん」

「うん」

「……あ、……くん」

声を出す度に、段々と言葉が聞こえてくる。

「……あー……………くん」

「うん」

「……あー、くん」

聞こえた。

「……あー、くん」

俺の名前。彼女だけが呼ぶ俺の名前。

「……あーくん？」

「俺の事……解る？」

ダメ、ぼやけていてハッキリと見えない。でもあーくんだと思う。

医師が言っていた。頭を強く打っているから、もしかしたら記憶を失くしているかもしれない。名前を呼ばれただけでは、ホントに記憶が失っていないとは言えない。

「あー、くん。……わ、かるよ」

声。伊奈世の声がする。幻聴でも記憶でもなくて本物の声。か細く消え入りそうな声だけど、伊奈世の声が俺の名を呼んでくれた。懐かしい響き。言葉が出るよりも先に、じんわりと鼻の奥から熱いものが込み上げてきた。

ぽつぽつと顔に何か降ってきた。暖かい……涙？ あーくん、泣いているの？ なんて？ 何か悲しいことでもあったの？

「そっか」

「泣いて、るの？」

「……君こそ、泣いてる」

「えっ？」

顔を歪めながら涙を確かめようと手を持ち上げようとしている。動かない伊奈世の手の代わりに俺の指が彼女の目尻に触れる。

「……んっ」

「ほら」

私に見せた指は濡れていた。私は気が付かないうちに泣いていたようだ。

八年振りに聞いた伊奈世の声は喋り方も音も何も変わっていない。

聞き慣れていて、憶えのないあーくんの声。徐々にはっきりとする視界で見るあーくんの顔。少し眠っていただけなのに、あの生意気で背伸びして無愛想で愛嬌のあった顔は、辰彦先生の面影を強く感じる大人の男の顔に変わっていた。一体どれほどの時間を、私は眠ってしまったのだろうか？

じいと俺の顔を見つめている伊奈世。こうして再び彼女の視線を受け止められるなんて……。そおっと頬を撫でると、くすぐったそうに顔を引き攣らせる。

「あー、くん、変わった」

「そう、かな？」

「うん」

伊奈世の生きている表情。八年経った事実を忘れて、つい昨日あったばかりの気持ちになる。

優しくなった。ぶっきら棒だった優しさは自然になり、見た目もすごくカッコ良くなって。子供の頃より何倍にも魅力的に感じる。

嬉しくて、悲しい。もうあの時に戻れないのだと。

でもそれと同時に、少しだけ悲しくもある。

「わた、しは？」

「……綺麗になってるよ。見違えるほど」

「なんか……あー、くんじゃ、ないみ、たい」

「そうかな？」

うん。言葉というか、女性のアシらい方が上手くなっている。彼の成長を隣で一緒に過ごすことができなかつたのが、寂しい。

「伊奈世……」

「な、に？」

彼女が起きた時、俺は言わなければならないことがある。突然過ぎる覚醒に嬉しくて、懐かしくて、舞い上がってしまった。

あーくん、何か考え込んでいるみたい。……………眠くなってきた。ぐらついて遠のいていく意識の中で、彼に伝えなければいけないことを思い出した。

「俺……君に言わなければいけないことがあるんだ」

あーくんも、私に？ でも、だったら、だから。私が先に———伝える。

「あのさ……」

「待って！」

「……ん？ どうした？」

「……りゅうすい、は？」

大きい声を出そうとして苦しそうに胸を上下させる伊奈世。いくら会話が出来ているとはいえ、目を覚ましたばかりなのだ。

「流水は？」

突然何を？ 流水？ 一体何の……。



「前に、教えて、くれた……落花、流水？ 流水のい、みは？」

「ん？ ……あっ、ああ」

忘れていたのか、反応に間がある。酷いな、私に言っておいて自分が忘れてるなんて。

「流水。うん、あの時言えなかった流水の意味は、時の流れと無常。幼少期からの時間の経過とそれに伴った想いの変化を現した言葉……だよ」

「……………。そっか。じゃあ、流水は……あー、くんだね」

「ん？」

「あのと、き……私に、おし、えた時。私のこと、を、落花に……例え、たかった、んだよね。だか、ら……私が、落、花で、今のき、みが流、水。…ふた、りで、落花流水……になる、ね」

彼女は憶えていた。俺が言った言葉を忘れていなかった。言葉は途切れ途切れになり、段々と瞼が閉じていく。それでも彼女は止めなかった。

「顔……寄せ、て」

「どうした？」

「いいか……ら。顔、寄せて」

言われた通り顔を近づけると、ゆっくりと細い両手が俺の首を触る。微かに伝わる掌の感触から掴もうとしているのがわかる。ああ、きともう思い出しているのだ。俺は一瞬強張った身体から力を抜くと、彼女の手が俺の手を重ねる。少しずつ首に食い込む指。苦しくもならない絞首ではあるけれど、彼女の腕が動くのに任せることにした。彼女の口元に俺の耳はあてがわれた。

「あー、くん」

耳に触る柔らかな感触、耳の奥に吹きかけるような囁き声。

「あの、ね……」

心臓がどくんと大きく波打ち声を掻き消そうとするが、伊奈世の声はそれ以上に俺の意識へ響いてくる。早鐘を打つ心臓を強引に意思で捻じ伏せ、平常心を保とうとする。

「あのね」

「ああ」

「……………。……………」

耳元でぼそりと呟かれた言葉。

言えた。ようやく、言えた。

俺の今までを打ち砕くような鮮烈な言葉。

伊奈世の指が首に食い込んだまま、俺は彼女の胸元に頭を置いた。心臓がどくんと波打つ音が直に響いてくる。

じゃあ、もういいよね。

彼女は疲れ果てたように静かに目を閉じた。

……………。

俺もゆっくりと目を瞑る。

……………。

何て馬鹿だったんだろう。

……………。

俺は手に入れていたんじゃないか。

あーくん。

「全く、敵わないな」

G.A.P いかがでしたでしょうか。

初めまして、蛹と申します。

今作が初めて公開する作品であり、あとがきを書くのも初めてとなります。

なので、漠然としたイメージはしていても、実際書くとなると悩むものだというのが、身に染みて分かります。巻末から読む方もいるのも知っているのですが、下手に内容に関わることは書けないですし、かといって、私の身の上話を書いたところで、しようもないですからね。まあ、触れるか触れないかギリギリの、あの何となく体温を感じて暖かいような微妙な線で話をします。

ということで、ポツネタ的な部分の話です。

今作は恋愛というジャンルで書いていたのですが、途中大きく道を踏み外し、一時期超常現象ものになりかけていました。意外にノリノリに進んで、最終的には主人公に一切触れずに終わる、という奇怪極まりない話でした。結局全て捨てましたが、名残のある部分が少しだけ使われているので、そこを見つけてもらえたら、面白いかなと思います。

「えっ？ 文章が下手で見つけれない？」

それはすいません。

これからも精進させていただきます。

そんな訳で、一作目G.A.P は完成の運びとなります。

本としての、文章の読みにくさは自分でも感じていますので、これからちょいちょい修正していくつもりですが、話としては、今のところこれ以上手を加えることはないと思います。

これが現在の私の持てる力と時間を掛けた作品です。

表紙をとうとう描いて頂きました。

私の知り合いの絵師さんで、 あいらす さんです。

線が細く水彩の色使いをする素敵な あいらす さん。私自身、今回の話にぴったりだと思ったのですが、いかがでしょうか？ 文章と絵とマッチしているのでしょうか？

雑記ブログ 蛹帳

<http://sanagi-forest.sblo.jp/>

あいらす さん、素敵な絵をありがとうございます。

そして、この作品を読んでいただいた全ての方に、ありがとうございます。

では、また次の作品でよろしく申し上げます。

2011年3月29日

蛹

## G.A.P

<http://p.booklog.jp/book/17415>

著者：蛹

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/sanagi-forest/profile>

発行所：ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/17415>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/17415>